

高等専門学校のクラブ活動を通じた観光案内英語リーフレットの製作

藤井数馬*

Producing a Tourist Guide Leaflet in English through Club Activities at Kosen Kazuma FUJII

Abstract: This paper serves three purposes: (1) to suggest the importance of encouraging students at Kosen (National Institute of Technology) to study outside the class and lead them to become an autonomous English learner in their lower-grade stage; (2) to report the project of making a tourist guide leaflet in English by the ESS (English Speaking Society) members at National Institute of Technology, Numazu College as an example of students' autonomous English learning outside the class; (3) to analyze the effects of the leaflet production in terms of the MAP perspective by Tanaka (2017), i.e., whether the learners feel it meaningful, authentic and personal. The first part of this paper deals with the importance of students' autonomous English learning outside the class in terms of the English learning environment at Kosen, where the learners' major subjects, i.e., engineering-related subjects, are put emphasis on and the total number of English class is limited in comparison with those at a high school. The next part of this paper focuses on the possibility of club activities to help students learn English autonomously. Then the process of making a leaflet is reported, in which students chose Numazu Port for their tourist guide spot, went there to take some photos, wrote the information of the spot from their viewpoint, and made a tourist guide leaflet in order to use it to guide foreign students.

Key Words: club activity, tourist guide, leaflet, Kosen

1. 緒言

工学を主専攻とする高等専門学校(以下、「高専」)では、初年次から専門科目が導入され、専門科目を学ぶための基礎科目として数学や物理等の理数科目に授業時間の比重が置かれている。その一方、英語や国語といった人文系の科目の授業時間は、一般的な普通科の高等学校よりも少ない(藤井・村上・青田, 2015 [1])。

例えば、沼津工業高等専門学校(以下、「沼津高専」)の教養科が担当している必修の英語授業時間は、1年生に対して7,245分、2年生に対して6,750分、3年生に対して5,400分、4年生に対して2,700分であり、5年生に対しては履修希望者に英語またはドイツ語の科目群から1科目選ぶ選択科目として週に1回90分の授業が用意されているだけで、必修としての英語授業はない。すなわち、5年間で合わせて22,095分(約368.3時間)の必修の英語授業時間であり、1年換算で平均すると約73.7時間に相当し、これを日数換算すれば1年間で約3.1日分の授業時間であることを意味する。これは、沼津高専の近隣にある静岡県立A高等学校の公式ウェブサイトで公開されているカリキュラムを参照し、概算した英語授業時間(文系33,250分、理系

31,500分)と比較してもかなり少ないことが分かる。また、この限られた英語授業時間が学年進行で少なくなっていくことも高専の英語教育環境の特徴と言えるものである。これは、学年進行で専門科目が増えていくことの半面として現れる特徴である。

一方で、国立高等専門学校機構の第3期中期計画(2016: 2 [2])の中で「英語については、TOEICなど積極的に活用し、技術者として必要とされる英語力を伸ばさせる」と明記されている。「技術者として必要とされる英語力」とは何を指すのかについては明記されていないが、卒業後に技術者として仕事を遂行するのに必要となる英語によるコミュニケーション能力のことと考えられ、その具体的使用場面はいくつも考えられるが、少なくとも、いずれの使用場面にも応用できるための基礎的な英語運用能力は必要になると考えていだろう。もう少し具体的に言えば、基礎的な言語リソースを涵養するとともに、そのリソースを使って仕事を遂行するためのタスク・ハンドリングができる能力を養成することが高専英語教員に求められていると言えるだろう。

このように、高専の英語教育環境として、授業時間が決して多くないこと、そして限られた英語の授業時間が学年進行で少なくなっていくことという大きく二つの現実に

* 教養科

即した上で、「技術者として必要とされる英語力を伸ばさせる」指導が高専英語教員に求められているということになる。それでは、高専の英語教育環境に即した指導指針を立案するためには、どのような視座に立脚して議論を行えばよいのだろうか¹。筆者は、少なくとも以下の二つの視座が重要になってくると考えている。

一つは、日々の英語授業の質を高める不断の努力をすることは前提として、学生たちにいかに授業外で英語学習をさせることができるかという視座である。これは、高専の英語授業時間が決して多いわけではないという先の指摘からの必然的な帰着である。事実、英語話者が日本語を習得するのに2,400時間～2,760時間かかるという指摘 (Brown & Larson-Hall, 2012: 8 [3]) が示しているように、高専の英語授業内の学習だけでは、技術者に必要とされる英語運用能力を習得するのは困難であろう。また、文部科学省が設置した英語教育改善のための英語力調査の分析・活用に関する検討委員会が行った、日本全国の国公立約500校の高校生から無作為抽出で約9万人を対象に平成27年6月末から7月にかけて行った調査では、CEFR (ヨーロッパ言語共通参照枠) レベルにおいてA1と判定された高校3年生は、「読むこと」において68.0%、「聞くこと」において73.6%、「書くこと」について82.1%、「話すこと」については89.0%であり、「依然として4技能全てにおいて課題がある」と報告されている (文部科学省, 2016 [4])。英語力において「課題がある」とされる高校生よりも少ない英語授業時間の中で、技術者に必要とされる英語運用能力を身につけさせるためには、授業外でも英語学習に向かわせるための施策を含めて考えていかなければならない。そしてその施策のためには、学生に何に挑ませ、授業では何を持ち込むのかという教育内容の選択のレベルでの専門性や、教育内容を展開するための教材づくりと状況設定のレベルでの専門性が求められることになる。

高専の英語指導を立案する際のもう一つ重要な視座は、学年進行で英語授業が少なくなっていくという現実を鑑み、英語の授業時間が比較的多い低学年次に英語の学習習慣を身につけさせ、英語の授業が少なくなる高学年次になっても自律的に英語学習に向かわせるための視座である。高専4、5年次の少ない英語授業時間内の指導で学習習慣を全ての学生に身につけさせるのは難しい。高専の英語教育環境を考えれば、英語の授業時間が比較的多くあり、細やかな指導が可能な1、2年次のうちに、自律的な英語学習を涵養させる指導が極めて重要である。そのためには、

次第に英語の授業時間が少なくなる中で、学生が自らの意思によって英語学習を進めていける指導指針を英語教員で議論、共有し、粘り強く、長期的に指導をしていく必要がある。そしてそのためには、この指針に沿う具体的な指導は、学生が自主的に取り組み、自律的な英語学習習慣を涵養できるように、分かりやすく、シンプルで、長期的に取り組めるものが望まれる。また、高学年次に自分の力で英語学習を進められるだけの基盤となる基礎的な英語力を低学年次に身につけさせる指導も併せて重要になってくるだろう。

2. 高専の英語教育環境を考慮した先行教育実践

こういった高専英語教育環境を考慮し、高専生を主たる対象とした教材はこれまで多く開発され、高専の英語教員内で共有されてきた (e.g., 亀山他, 2012 [5]; 亀山他, 2017 [6]; 奥村他, 2017 [7])。また、高専の英語授業時間数の現実に鑑み、英文法や語彙学習において、教科書の読み込みは授業前の段階で終えておき、授業では分からないところの問題解決や発展的学習内容への協同的な取り組みを行うことは、今後の高専英語教育で推進すべき方向性と言えるだろう。この観点から、すでに仙台高等専門学校で実践されている反転授業 (武田・亀山・青山, 2017 [8]) は、授業内容と関連した学習を授業外で行わせ、自律的な英語学習習慣を形成させることを組み込んだ具体的な指導例であり、大きな示唆を与える注目すべき取り組みと言えるだろう。

高専におけるこれら様々な英語教育の取り組みがある中で、成功事例の一つと目されているのが、豊田工業高等専門学校 (以下、「豊田高専」) における英語多読多聴である (Nishizawa, Yoshioka, & Fukada, 2010 [9]; Nishizawa, Yoshioka, & Ichikawa, 2017 [10])。低学年のうちから英語多読多聴を授業内で取り入れ、読語数や本の難易度の観点から到達目標を学年ごとに可視化し、授業外でも多読多聴を行わせる仕組みを構築し、長期継続的に指導を行うことで、英語運用能力の向上はTOEIC®スコアにおいて顕著に表れている。豊田高専における英語多読多聴の取り組みは、授業外の英語学習を促進し、低学年次から自律的な英語学習習慣を身につけさせる指導の具体事例であり、先に論じた二つの視座を満たしたものであると言える。

また、豊田高専における英語多読多聴は、高い波及効果をもたらしたことも特徴的である。すなわち、取り組みの成果が伝わることで、豊田高専内においては新しく多読多聴を始める低学年の学生の動機づけとして機能し、学外では英語多読指導を低学年次から取り入れる高専を多く生み出す契機となっている (e.g., 新川, 2012 [11]; 藤井, 2011 [12]; 久保田, 2014 [13]; 高橋, 2014 [14])。沼津高専でも平成

¹ 本稿における指導指針とは、指導の大きな方向性を意味するものである。この指針に沿って、具体的な指導内容や指導法を考えるとともに、学生を動機づけていかなければならない。

24年度より主に1～3年生を対象に定期的に英語多読を取り入れている。そしてその成果は、情意面の改善（藤井, 2013 [15]）や、読解速度の上昇（藤井, 2017 [16]）等で見られている。さらに、授業外での多読を促進する目的で、自分に合った多読図書を、沼津高専図書館に所蔵されている英語多読図書の中から検索できるように、本の語数やシリーズやキーワードやYL（Yomitasusa Level）²から選書できるように、「沼津高専多読図書検索システム」³を構築した（藤井他, 2015 [1]）。また、平成28年度からは3年生の授業において、多読でインプットした英語をアウトプットに繋げるための活動として、英語でミニビブリオバトルに取り組んでいる（Fujii, 2017 [18]）。このように、高専の英語教育環境において、授業外で英語学習をさせること、低学年のうちに英語学習習慣を身につけさせることを勘案して設計された指導は、他の高専にも波及しながら、その高専に合ったかたちへと発展し、根付いていく波及効果が期待できると言える。

以上の議論に基づき、本稿で着目したいのは、課外活動が高専の英語教育で果たす可能性である。すなわち、クラブ活動や国際交流に関わる活動等、正規の教育課程外で行われる課外活動には、学生を授業外で英語学習に向かわせ、自律的な学習習慣を身につけさせることの可能性を認めることができるからである。つまり、文字通り、課外（授業外）で、学生の意志と自律性を基盤にして進められることが多い課外活動を、高専生にとって「技術者として必要な英語力」を身につけさせる場として活用できる可能性があるからである。事実、課外活動の一環として行われている全国高等専門学校英語プレゼンテーションコンテスト（以下、「プレコン」）は平成29年度で11回目を迎えるが、毎年非常に高いレベルのスピーチやプレゼンテーションが披露され⁴、高専生の英語力を高める機会の一つとなっている。

プレコンに代表されるように、各高専において課外活動による取り組みが一定の成果を上げている現状があると思われるが、具体的にどのような活動が行われており、その効果や影響はどのようなもので、限りある教員の人的資源の中でどのように運営されているのか等については、十分に共有、議論、分析がなされていない。昨今、クラブ活

動のあり方について議論をしていく必要が叫ばれている中で（e.g., 内田, 2017 [19]）、全国の高専で行われている英語教育に関わる課外活動の取り組みについて事例を共有することで可視化し、活動の意義や効果を分析し、高専の英語教育で広く実践可能且つ持続可能なかたちへと発展させていく必要があるだろう⁵。課外活動は、授業外で自律的な英語学習習慣を形成するという高専の英語教育環境で考えなければならない要素を満たし、ゆえに高専生に技術者として必要な英語力を身につけるための活動として高い可能性を孕んでいる。この活動を、教育的な意義があり、持続可能で、高い波及効果をもたらすかたちに発展させていくことは、高専英語教員が実践の中から得られた知見を基盤に深めていかなければならない課題であろう。

高等教育機関における課外活動は、学生会活動、寮生会活動、学校行事、国際交流活動、クラブ活動等を言及するが、その中で英語学習と特に密接に結びつくのは、国際交流活動と英語部やESS部等に代表されるクラブ活動だろう。このうち、海外研修や海外インターンシップに代表される各高専の国際交流活動やその影響や効果に関してはすでに一定数の報告がなされている（e.g., 阿部, 2013 [20]; 穂本, 2017 [21]; 岩下・Grumbine, 2013 [22]; 櫻村, 2016 [23]; 岡田, 2017 [24]）。その一方、高専のクラブ活動に関する報告は一部あるものの（e.g., 嵯峨原, 2016 [25]; 山崎, 2016 [26]）、決して多くはない。例えば、プレコンの指導はクラブ活動の中で行われている場合も多いと考えられるが、どのように教員が学生を動機づけ、どのように指導し、コンテスト以降の英語学習にどのような影響を与えたのか等について、体系的に分析された研究は筆者の知る限りない。また、常時活動として学生の意思と自律性を基盤にしてどのような取り組みが行われ、その活動の教育的、あるいは英語習得上の意義を分析し、持続可能な取り組みとして提言した研究や報告もない。

そこで本稿では、沼津高専ESS同好会の部員が沼津高専に来る短期留学生に観光案内をするために製作した、沼津港の観光用英語リーフレットの製作の活動について報告したい。そして、この活動の意義について、田中（2017）[27]による英語教育の質を担保する三要素（meaningfulであること、authenticであること、personalであること）の枠組みから分析し論じたい。さらに、この活動を持続可能なものとするための今後の展望をまとめた。課外（正規授業外）で、学生の意思と自律性を基盤として進められることが想定されているクラブ活動に、高専生の英語力を高める

² YL とは、SSS（Start with Simple Stories）研究会が独自に定めた日本人英語学習者にとっての読みやすさの指標であり、YL 0.0 から YL 10.0 まで 100 段階でその本の読みやすさを示し、数値が小さいほど一般的に読みやすいとされている（Takase, 2012 [17]）。

³ <http://tadoku.numazu-ct.ac.jp/index.php>

⁴ 例えば、平成 28 年度に行われた第 10 回のプレコン出場者の発表の様子は、

<http://cocet.org/precon/2016/index.html>で見ることができる。

⁵ 本稿はクラブ活動の存在の是非を問うことを目的としたものではない。教員の労働環境改善のためにも、クラブ活動で行われている事例を共有し、それらの教育効果を分析し、各高専で持続可能な活動にしていくための報告である。

ための可能性を見出すことができるのは先述したとおりである。また、少人数で取り組む活動であるからこそ、正規授業では実現できないユニークな活動を行うことも可能である。本稿は、クラブ活動を活用した一つの実践事例をまとめ、その意義を分析することで、他の高専において還元可能な、実践可能性の高い知見を提供することを目的としたものである。

3. 高専のクラブ活動に関する先行報告事例

英語部やESS部等、高専におけるクラブ活動での実践報告としては、嵯峨原(2016)[25]と山崎(2016)[26]がある。嵯峨原の勤務する鹿児島工業高等専門学校の英語部は60名を越す大所帯であり、指導体制も顧問教員4名に加え、ネイティブスピーカーの外部コーチが揃っている。学生の自主性を重視したクラブ運営方針がとられており、活動内容も英語劇に代表される学内活動に加え、九州沖繩地区高専英語弁論大会等にも積極的に参加している。部員たちは部内の各セクションに分かれ、それぞれの目標に向かって日々の活動に自律的に取り組んでいることが報告されている。これは、高専の学生に対し、授業外で自律的に英語学習や英語活動に取り組む姿勢を実現させた事例である。その結果として、英語部員たちは英語弁論大会やプレコンでも優秀な成績を収めており、英語運用能力を向上させる機会として機能していることが窺える。

山崎(2016)[26]は、2012年4月に創設された、長野工業高等専門学校における英語同好会で取り組んだ4年間の活動内容を報告している。様々な英会話活動を取り入れ、学生の状況を見ながら試行錯誤を重ねてクラブ活動を運営していることを、その軌跡とともに報告している。

ここで指摘しておきたいことは、たとえ英語部に所属するような英語学習意欲の高い学生であっても、学生の意思と自律性によって高専のクラブ活動を適切に運営することは決して容易ではないということである。放課後の時間は実験実習でクラブ活動に参加できない学生が少なくなく、寮生活を送る学生であれば寮生活による時間的制約もあり、高学年の学生であれば就職活動や編入試験の準備でクラブ活動に参加できなくなることが多い。この状況だと、高学年でリーダーとなる学生が参加できない場合や、定期的に学生が活動に参加できない場合が多くなり、結果としてクラブ全体としては自律的な活動が難しい状況が生じる。しかし、だからといって、全てを教員主導で運営してしまうと、余計に学生の自律的な活動が難しくなってしまう。大学や高等学校とは異なる高専という教育環境において、課外で自律的に行うクラブ活動事例を共有する意義があるのは、まさにこの高専に特有な困難さを背景にしているからである。

4. 観光案内の英語リーフレットの作成

4.1. 沼津高専ESS同好会の再活動と運営形態の変更

沼津高専ESS同好会は、平成22年度から25年度まで、4年間休部状態であった。しかし、平成25年度にプレコンに出場した3人の学生を中心に、合わせて7人の学生が呼びかけに応じ、筆者が顧問に就くことで平成26年4月からESS同好会を再活動させることになった。再活動をさせた目的は、授業以外で自律的に英語学習に取り組む機会を創出することにあった。再活動するに当たり、活動内容を部員と議論したが、部員も休部前の活動の様子が分からず、英語の課外活動のイメージが湧かないこともあり、その大部分を教員主導で運営せざるを得なかった。具体的には、常時活動として英語の会話練習や多読多聴を行い、各部員には1年間の目標を決めさせ、部員の多くがプレコンの予選となる東海北陸地区高等専門学校英語スピーチコンテストや、全国英語教育研究団体連合会が主催する全国高等学校生徒英作文コンテストや、静岡県三島市国際交流協会が主催する姉妹都市親善英語スピーチコンテスト等の各種コンテストに挑戦することを目標に据えた。

結果としては、ESS同好会からこれらコンテストに積極的に参加し、再活動した平成26年度から平成28年度の3年間で、東海北陸地区高等専門学校英語スピーチコンテストでは地区大会優勝1名(プレコン出場)、3位入賞2名、全国高等学校生徒英作文コンテストでは1年生の部で入選2名、2・3年生の部で入選4名、姉妹都市親善英語スピーチコンテストには1名の学生が出場という実績を残した。しかしながら、これらコンテストは個人による活動と努力を基盤とするため、クラブ全体としての自律的な取り組みのあり方としては課題を感じていた。この現状の中で、今後の方向性を示唆する活動となったのが、英語に苦手意識を持つ1、2年生を定期試験前に集めてESS同好会の部員が補習を行う学習支援(寺前・鈴木・高橋・藤井, 2014[28])である。具体的には、各定期試験前に英語教員が補習対象者を選び、3年生以上の部員1人に対して4人程度の1、2年生を割り当て、定期試験範囲の学習内容(主に文法)の問題演習を行いながら、質問に答えたり必要に応じて声かけをしたりするという形態の学習支援である。1、2年生にとっては教員よりも年齢が近く、自分たちが現在学習している科目の単位を修得してきたESS部員にはより気軽に質問ができ、部員にとっても1、2年の学習内容を下級生に教えられるように復習する良い機会となっただけでなく、責任を持って学習支援にあたり感謝されたことで、やり甲斐を感じる活動となった。

この学習支援活動は、クラブ全体としての取り組みとなり、学生をより前面に出す活動となったが、補習対象者を

選ぶことや募集すること、補習対象者とESS部員の日程が合うか行事予定を参照しながら日程を決めること、当日の実施形態の決定等、教員主導で運営せざるを得ない要素も多かった。また、常時活動としては機能しにくいことから、もっと学生に活動を預けて、学生が自分たちで行える範囲で、当初の目的である授業外で自律的に英語に関わる機会の創出をする必要性を感じていた。

ここまでの2年間の活動を内省した結果、再活動3年目にあたる平成28年度から活動内容や活動日を全面的に学生に任せる運営方針に変えることを提案したところ、当時の部長を中心にこの方針に理解を示してくれた。そして、平成28年度の活動内容を何にするかについて話し合っていたミーティングの中で、活動案の一つとして挙げられたのが、沼津高専に毎年1カ月程度来る韓国とタイからの短期留学生に、周辺の観光案内を英語ですることであり、その観光案内のための英語リーフレットの製作というプロジェクトであった。留学生に沼津周辺のことを知ってもらえるとともに、自分たちの英語運用能力を向上させることができると考えてのプロジェクトである。常時活動としては、英語の会話練習やリスニング練習やゲームを取り入れ、英語リーフレットの製作を年間プロジェクトに設定して活動を行う方針が決められた。

4.2. リーフレットの製作

リーフレットの製作に当たっては、ESS同好会部員によるミーティングにより、扱う地域として沼津市と三島市を選び、各市内で紹介したいと思う地区や観光名所を自分たちの視点から選び、自ら現地に行って取材を行い、自分たちがこれまでの英語学習で身につけてきた英語を使って紹介することで、「学生サイズ」の観光案内英語リーフレットを製作し、観光協会等によって一般に頒布されている英語の観光案内との差別化を図った。

平成28年度では、留学生に訪れてもらいたい場所として部員が選定した楽寿園や源兵衛川等の三島市の観光スポットへ取材に出かけ、写真撮影も行ったが、6月くらいになって5年生部員が編入学試験のため活動に参加できなくなるとプロジェクトの進行も滞り、この年度はリーフレットの完成には至らなかった。しかし、新年度に向けて活動内容を話し合うミーティングにおいて、本プロジェクトを継続する意思決定がなされたことで再び動き出した。仕切り直しとなった平成29年度は、沼津市内で観光客が多く訪れる沼津港を選び、春季休業期間を利用して現地で取材や写真撮影を行った。そして、沼津港周辺の観光場所として学生たちが選んだのが大型展望水門の「びゅうお」であり、海鮮料理を楽しめる店や土産店が立ち並ぶ港八十三番地を中心としたグルメストリートである。そして、沼津港

周辺の飲食店のうち2店舗を取り上げ、それぞれの店の人気定番メニューの紹介や印象を、写真とともにまとめた。

この取材の後、平成29年4月からのクラブ活動の時間を利用し、取材した内容をリーフレットとしてどのようにまとめるのかを議論し、部員で分担して英語に直し、部員同士で英語表現をチェックして、6月にリーフレットが完成した（付録参照）。A4サイズに両面印刷し、三つ折りにしたのが完成版の形となる。

このリーフレット完成後、7月に沼津高専に来たタイからの短期留学生に配布し、簡単な説明を英語で行った。ただ非常に残念だったのは、平成29年度は日程調整をする時期が遅れ、留学生と部員の都合が合わず、このリーフレットを使っただけの現地での観光案内が実現しなかったことである。しかし、製作したリーフレットをさらに充実させること、そして沼津の良さを伝えられるだけの十分な英語運用能力を身につけることが来年度に向けて新たな目標として部員の間で共有されたことは、このプロジェクトを行ったことの影響と言えるだろう。

4.3. 本プロジェクトの英語教育上の意義

田中(2017)[27]は、英語教育を成功に導く条件として、*language exposure*の質と量、*language use*の質と量、*urgent need*の存在の三点を挙げている。このうち、英語教育において「質」を高めるための議論が十分になされていないことを指摘した上で、英語教育で扱う言語材料や活動やタスクの質を決める要素として、それらが学習者にとって *meaningful*なものであり、*authentic*なものであり、*personal*なものであるかどうかを重要であることを指摘している。このうち、*meaningful*なものというのは、(言語表現等が)意味がある、意味が分かるという意味と、(言語活動等が)意義のある、価値があるという意味の二つがある多義語として使われており、*authentic*なものというのは、言語材料の *authenticity* (i.e., *language authenticity*)、言語活動の *authenticity* (i.e., *task authenticity*)、学習者が教材や活動を *authentic*と感じるかという *authenticity* (i.e., *learner authenticity*) に細分化されている。そして、*personal*なものというのは、英語学習を自分事と捉え、教科学習としての英語を超えて、リソース化された英語、すなわち <my English> (田中, 2016 [29]) を自分の中に作り上げていくものになっているかどうかという視点である。これら三要素の関係は、*meaningful*で*authentic*なものであれば*personal*なものになり、*authentic*で*personal*なものであれば*meaningful*なものになり、*personal*で*meaningful*なものであれば*authentic*なものになるという、相補的な関係として機能するものである。

この三要素の観点から、ESS同好会の部員たちが取り組

んだ、観光案内英語リーフレットの製作プロジェクトがもたらした意義について考察したい。まず、このプロジェクトは学生たち自身の意思に基づき取り組むことを決めたものであり、自律性を基盤に進められたものである。これは、このプロジェクトに取り組むことで、留学生との交流や支援に繋がり、自分たちの英語力向上に繋がるということに意義や価値を見出したことの証左と言えるものである。すなわち、このプロジェクトは、活動の意義として **meaningful** なものであったことを認めることができる。また、自分たちの視点からリーフレットに掲載する場所や飲食店を選定し、自分たちがこれまで学んで身につけてきた英語を基盤にしてリーフレット内の英語表現を作成した点で、非常に **personal** な活動であったと言える。違う観点から言えば、自分たちにとって意味が分かる英語表現を用いてリーフレット内の記述をしたということであり、「言語表現の意味が分かる」という点でも **meaningful** な活動であったということになる。そして、このリーフレットを製作するという本プロジェクトが、英語を我が事と捉え、**<my English>** を構築していく過程に寄与したと分析することができる。

実現はしなかったが、短期留学生を英語で案内する機会があった場合、自分たちで書いたこのリーフレットを用いた方が、一般に頒布されている英語の観光案内パンフレットの英語を用いるよりも、学生たちにとっては案内がしやすいと考えられる。換言すれば、自分たちで製作したリーフレットの英語が **personal** なものであり、**meaningful** なものであるということである。「いつかどこかで誰かのため」に製作したものではなく、「留学生が来た時に、沼津高専周辺で、彼ら（彼女ら）への観光案内のために」という明確な目標の下に、我が事として製作したこのリーフレットは、学生たちに **authentic** なもの（*i.e.*, **learner authenticity** を満たすもの）として機能した活動とすることができるだろう。

以上の議論から、本稿で紹介した短期留学生のための沼津の英語観光案内製作は、学生にとって **meaningful** なものであり、**authentic** なものであり、**personal** なものであり、言語使用 (**language use**) の質の向上に貢献した活動であったと分析できる。また、正規授業外で、学生の自律性を基盤にして進められた活動という点からは、高専生の英語運用能力向上のために意義がある活動とすることができる。

5. まとめ

本稿では、高専の英語教育環境の特徴として、授業時間が決して多いわけではないこと、そして授業時間は学年が上がるごとに少なくなっていく傾向があることを指摘した上で、この環境に即した英語教育指針を議論するために、学生に授業外で英語学習に向かわせ、低学年次に自律的な

英語学習習慣を身につけさせることを指導に組み込むことの重要性について指摘した。そして、この二つの指導を組み込んだ高専生を対象にした英語教育実践の事例として、Nishizawa et al. (2017)[10]らによる英語多読多聴指導を挙げるとともに、国際交流活動やクラブ活動に代表される課外活動に、高専生の英語運用能力向上のための可能性を見出すことができる可能性を指摘した。そして、課外活動の中でも英語部やESS部に代表されるクラブ活動に焦点を当て、高専のクラブ活動に関わる事例報告や研究が少ないことを指摘した上で、高専英語教員間で活動事例を共有し、その教育的意義や学習効果を分析し、実践可能性と持続可能性が高いかたちに発展させていくことの必要性を指摘した。

そして、クラブ活動の事例の一つとして沼津高専ESS同好会の部員が主体的に取り組んだ沼津港周辺の観光案内英語リーフレットの製作という活動について報告した。その英語教育上の意義については、田中 (2017) [27]が述べる「MAP」の観点、すなわち **meaningful** であること、**authentic** であること、**personal** であることの三つの観点から分析し、言語使用の質向上に繋がる活動であったことを指摘した。

本稿で取り上げた報告は、クラブ活動を通して、学生たちが自律的に英語使用の機会を創出した一つの事例である。そして、この自律的な行動が、これまで学んできた教科としての英語を、**meaningful** で、**authentic** で、**personal** な英語にすることに繋がった。高専のクラブには、1年生から5年生まで（あるいは専攻科2年生まで）様々な学年の学生が集まっている。この一つの事例を持続可能な活動としていくためには、学生たちの主体性を重視しながら、クラブ内で上級生から下級生に発展的に引き継がれるように導いていく必要がある。そして、引き継ぎの方向性としては、製作したリーフレットを使って平成30年度には実際に短期留学生を案内するのか、町に出て道行く外国人観光客に案内を申し出してみるのか、あるいは沼津市内で沼津港以外の観光案内リーフレットを製作して充実させていくのか、沼津市から離れて三島市や長泉町など近隣市町村の観光案内リーフレットを製作するのか、あるいは日本滞在中の予定が詰まっている短期留学生であっても平日の放課後で案内が可能な、沼津高専から徒歩圏内にある、沼津高専学生だから知っているような珍しいスポットを取り上げたリーフレットを製作するのか等、いくつもの方向性が予想される。学生の主体性を重視しながらも、その活動が学生にとって **meaningful** で、**authentic** で、**personal** なものとなり得るのかを判断し、適切に導き、助言を与えていく舵取りは顧問教員がしなければならない重要な任務であろう。

高専生に「技術者として必要とされる英語力」を身につ

けさせるためには、授業外で英語学習に向かわせ、低学年次に自律的な英語学習習慣を身につけさせる指導指針を考案し、継続して粘り強く指導しなければならない。クラブ活動は授業外で学生の自律性に基づき運営されることが想定されていることを考えると、各高専で取り込まれている事例が共有され、各高専に適したかたちで取り入れられることで、高専生の英語運用能力の向上に寄与する可能性が十分ある。本稿で紹介した取り組みを今後発展的に持続可能な活動にしていくとともに、高専の英語課外活動の事例を集め、その影響や効果、あるいは英語教育上の意義を分析していきたい⁶。

参考文献

- [1] 藤井数馬・村上真理・青田広史：沼津高専における英語多読指導と継続支援のためのウェブサイトの開発，平成27年度東海工学教育協会高専部会シンポジウム発表資料，(2015)。
- [2] 国立高等専門学校：第3期中期計画，(2016)
<http://www.kosen-k.go.jp/information/keikaku280328.pdf>
(最終検索日2017年9月30日)。
- [3] Brown, S. & Larson-Hall, J.: *Second language acquisition myths: Applying second language research to classroom teaching*. The University of Michigan Press, (2012).
- [4] 文部科学省：平成27年度英語力調査(高校3年生)の速報(概要)，(2016)。
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/117/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2016/05/24/1368985_7_1.pdf (最終検索日2017年9月29日)
- [5] 亀山太一他：COCET2600—理工系学生のための必修英単語2600，成美堂，(2012)。
- [6] 亀山太一他： *Fundamental Science in English*，成美堂，(2017)。
- [7] 奥村信彦他： *Exploring SciTech English*，開隆堂，(2017)。
- [8] 武田淳・亀山太一・青山晶子：高専低学年における反転授業の導入と展開—新概念の教材と汎用モデルの組み合わせ—，全国高等専門学校英語教育学会研究論集，36，(2017)，pp. 237-246。
- [9] Nishizawa, H., Yoshioka, T., & Fukada, M.: The impact of a 4-year extensive reading program. In M. Stoke (Ed.) *JALT 2009 Conference Proceeding*, (2010), pp. 632-640.
- [10] Nishizawa, H., Yoshioka, T., & Ichikawa, Y.: Effect of a six-year long extensive reading program for reluctant learners of English, *Modern Journal of Language Teaching Methods*, 7(8), (2017), pp. 116-123.
- [11] 新川智清：多読・多聴を導入した沖縄高専の英語教育：1期生から7期生まで，沖縄工業高等専門学校紀要，6，(2012)，pp. 27-37。
- [12] 藤井数馬：託開キャンパスにおける英語多読環境の構築，香川高等専門学校研究紀要，2，(2011)，pp. 97-107。
- [13] 久保田佳克：仙台高専広瀬キャンパスにおける英語多読環境の整備とその利用，仙台高等専門学校広瀬キャンパス教育研究紀要，44，(2014)，pp. 7-12。
- [14] 高橋愛：英語多読の実践が英語運用能力の向上にもたらす具体的効果—「英検Can-doリスト」を通して—，第24回「英検」研究助成報告書，(2014)，pp. 138-144。
- [15] 藤井数馬：学習実態に基づく1年間の多読授業が読解情意面と外部試験結果に与えた影響，中部地区英語教育学会紀要，42，(2013)，pp. 197-202。
- [16] 藤井数馬：授業内多読による英文読解速度の変化について，中部地区英語教育学会紀要，46，(2017)，pp. 247-252。
- [17] Takase, A.: The impact of extensive reading on reluctant Japanese EFL learners, *The European Journal of Applied Linguistics and TEFL*, 1, (2012), pp. 97-113.
- [18] Fujii, K.: The Mini-Bibliobattle as an output activity of extensive reading: The rationale and procedures, 全国高等専門学校英語教育学会研究論集，36，(2017)，pp. 77-86。
- [19] 内田良：ブラック部活動—子どもと先生の苦しみに向き合う，東洋館出版，(2017)。
- [20] 阿部恵：グローバル社会で共生できる技術者育成—本科生を対象とした国際交流の歩み，八戸工業高等専門学校紀要，48，(2013)，pp. 23-30。
- [21] 穂本浩美：高専における海外研修の問題と可能性—プログラム構築における観点から—，全国高等専門学校英語教育学会研究論集，36，(2017)，pp. 29-37。
- [22] 岩下勉・Grumbine, R.: 有明高専とシンガポール・ポリテクニックとの国際交流プログラム，有明工業高等専門学校紀要，49，(2013)，pp. 15-22。
- [23] 樫村真由：海外インターンシップが高等専門学校専攻科生に与える影響について—英語運用能力自己評価と国際理解の観点から—，全国高等専門学校英語教育学会研究論集，35，(2016)，pp. 127-236。
- [24] 岡田晃：小山高専内における国際交流の取り組みについて：学生の英語学習における動機づけについて，全国高等専門学校英語教育学会研究論集，36，(2017)，pp. 107-114。
- [25] 嵯峨原昭次：学生主体の英語部の活動—鹿児島高専課

⁶ ESS 同好会の再活動から現在まで、活動に関わってくれた学生たちに謝意を表したい。また、付録のリーフレットは、沼津高専 ESS 同好会の鈴木史栄君、戸部泰佑君、松本浩輝君（いずれも製作時4年生）が中心に取り組んで完成させたものである。ESS 同好会における自律的な活動の方向性を示してくれた3名に感謝の意を表したい。

外活動の一例一, 全国高等専門学校英語教育学会研究論
集, 35, (2016), pp. 69-75.

[26] 山崎健一: 長野高専英語同好会活動における実験的英
会話教育法: 実践的英会話能力の養成を目指して, 長野
工業高等専門学校紀要, 50, (2016), pp. 1-7.

[27] 田中茂範: 英語教育の論点: 教育の条件、CLT、
CAN-DO, JACET 関東支部月例研究会講演資料, (2017).

[28] 寺前香里・鈴木佑季・高橋一将・藤井数馬: 学生によ
る学生のための英語学習支援活動の試み, 富士山麓アカ
デミック & サイエンスフェア 2014 ポスター発表資料,
(2014).

[29] 田中茂範: 英語を使いこなすための実践的学習法
—my English のすすめ, 大修館書店, (2016).

付録

The composite image consists of several parts:

- Map:** A map of Numazu, Shizuoka Prefecture, showing the Kano River, Suruga Bay, and Mt. Fuji. A red dashed box highlights the 'Numazu Port Area'. A legend indicates: ① View-O, ② Numazu Port Gourmet Street, ③ Numazu Burger, ④ Fumino.
- Tourist Guide Cover:** 'NUMAZU CITY, SHIZUOKA PREFECTURE NUMAZU-PORT AREA Tourist Guide 2017'. It features a photo of a beach with Mt. Fuji in the background and lists 'Natural Scenery' and 'Sightseeing facilities'.
- View-O Panel:**
 - View-O**
 - Explanation**: This is an observation platform built on water gates. You can see whole Suruga gulf and Numazu city there. If it is good weather, you can see Mt. Fuji. Admission fee is 100 yen! It is reasonable price. You don't have to hesitate to go there even if you don't have much money.
 - Impression**:
 - It is just 30 m above the sea level, but it shows us a view completely different from the one which we see on the ground. It was unforgettable.
 - I felt like I became a bird.
 - We could see the mouth of the Kano River, Suruga Bay and the Numazu Alps at the same time. I think it is valuable.
- Numazu Port Gourmet Street Panel:**
 - Numazu Port Gourmet Street**
 - Explanation**: You can buy and enjoy seafood such as dried fish, Tombi (a mouth of squid) and so on. There are also many souvenir shops and restaurants. You can eat local marine products there.
 - Impression**:
 - It was lively and crowded with a lot of people at noon.
 - I didn't know there is such a bustling port in Numazu. I want to search more.
 - Image:** A photo of a seafood market stall with a sign that says 'Minato 83'.
 - Caption:** ↑ This place is "Minato 83." Their motto is "more delicious, cheaper and better service."
- Numazu Burger & Fumino Panel:**
 - Numazu Burger & Fumino**
 - Numazu Burger**
 - Explanation**: We can enjoy eating hamburger with lots of fishes from Suruga Bay. The most popular one is "Deep sea fish burger".
 - Image:** A photo of a fish burger.
 - Impression**:
 - It was very delicious!
 - I thought it had strong fish smell, but it was not. We enjoyed that good taste of white-meat fish.
 - The combination of hot fries, shredded cabbage and special aurora sauce was great and delicious.
 - Fumino**
 - Explanation**: It takes 1 min on foot from Numazu Burger. We can eat various kinds of "kaisendon".
 - Impression**:
 - "Fumino Don" is assorted a lot of young sardines and sabura shrimps. I enjoyed eating a lot of sashimi.
 - Image:** A photo of a bowl of sashimi.
 - Caption:** ← This is Kaisendon.